

2023 年度 自己点検評価書

岐阜薬科大学

1. 「教育」に関する自己点検評価

① 概要

教育分野では、新6年制の導入・確立、薬学スペシャリストの育成、グリーンファーマシー教育推進、教育システムの充実、カリキュラムの持続的な改良、修士課程・博士課程進学学生の支援の実践に向け、活動を行った。

新6年制の導入・確立では、薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂版）にあわせ、教務委員が中心となって授業科目、シラバスのフォーマット、時間割などの改訂作業を進めた（資料1-①-1）。また、開講科目数のスリム化、授業間連携の強化、学修成果基盤型教育の更なる発展に向け、令和6年度入学生から1科目2単位（15コマ）授業になるため、学年暦を調整した（資料1-①-2）。

2回生の研究室見学会では、昨年度のアナケート調査による学生の要望を取り入れ、見学先を3研究室から5研究室に増やした（資料1-①-3）。

特別実習においては、昨年度から導入した方針に則り、卒業論文を事務局へ提出するとともに、副査による査読を受けた（資料1-①-4、1-①-5）。今年度も大きなトラブルがなく、すべての6回生から卒業論文が提出された。また、ルーブリック評価表を用いて学生の能力を確認し、特別実習の評価に利用した（資料1-①-6、1-①-7）。

以上、今年度は当初の計画だけでなく、追加の活動も早急に実施することができた。来年度も同様の取り組みを行う。

薬学スペシャリストの育成では、6年間の形成的な教育研究指導を充実させるため、「ふりかえりワークシート」、「ディプロマ・ポリシー到達度評価シート」、「ポートフォリオ」の作成を学生に指示し、アドバイザーによる学生面談の指導に利用した（資料1-②-1、1-②-2、1-②-3）。自己評価により学生は主観的に自身の成長を把握するとともに、教員の客観的評価との差異を知ることにより、弱点や不足している点を確認することができた。

特別実習において、学生が予期せぬ事故を起こしそうなことがあるため、化学倫理、生物倫理、医療倫理に関するガイダンスを計画し、3回生後期の研究室配属時に実施した（資料1-②-4）。

教育研究活動の充実と発展に向け、全学的な教育施策のデータ収集・分析並びに継続的な改善の推進及び支援を行う部署として教学IR推進室を新設し、学生の成績、進級・退学状況などに関する事項を分析した（資料1-②-5）。専門部署に新規職員を雇用することにより、継続的かつ客観的な分析が可能になった。今

年度は、学生の入学時の成績、学年毎の成績、国家試験の可否の関係を分析し、その結果を教授総会で報告することにより、今後の指導方針を確認した。

東海地区の4大学（岐阜薬科大学、名古屋市立大学、静岡県立大学、鈴鹿医療科学大学）で申請した令和5年度文部科学省（大学改革推進事業）「地域の医療ニーズに対応した先進的な薬学教育に係る取組支援事業」が採択され、「東海地区連携で行う薬剤師不足地域でのアドバンスト実習とそれを活用した薬学生・薬剤師 PBL 学習プログラムの構築」の一環として、岐阜県飛騨・高山地域、沖縄北部地域、静岡県川根本町地域、三重県尾鷲地域に学生を派遣した（資料1-②-6）。本実習には、各大学の5年生が参加し、机上の学習では知りえない地域の実情を自ら体験することができた。

昨今の情報化社会で活躍できる薬学スペシャリストの育成に向け、データサイエンスやAI教育を充実させるため、情報処理基礎実習（1年次）、統計学（1年次）、医薬品情報学（3年次）の3科目で構成されるGPU数理・データサイエンス・AIリテラシー教育プログラムを構築した（資料1-②-7）。また、教務委員会や自己点検評価委員会などと連携し、プログラムの改善・進化に向けた体制を整備した。本取り組みを数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度に申請し、リテラシーレベルの認定を受ける予定である。

以上、今年度は当初の計画だけでなく、追加の活動も早急を実施することができた。来年度も同様の取り組みを行う。

グリーンファーマシー教育推進では、令和5年度以降は、令和4年度第20回教授総会において提案した形式において講義・教材等についてのアンケートを実施することとした（資料1-③-1）。グリーンファーマシー教育推進センターがアンケート実施日の調整や回収率のフィードバックを行った。その結果、担当教員や学生が混乱することなくアンケート実施方法を変更することができた。

第2回教授総会において、令和4年度講義・教材等についてのアンケート集計結果を示し、学生のアンケート回収率が高まるよう講義時に詳しい趣旨説明をするよう全講義担当教員に依頼した（資料1-③-2、1-③-3）。例年と概ね同程度のアンケート集計結果より、本年度の講義は概して例年と同様に好評であったと思われる。

全開講科目の講義・教材等についてのアンケート回答率を集計した。実施方法の変更により、アンケートの回答率は45.3%（令和4年度）から57.4%（令和5年度）に上昇した（資料1-③-4、1-③-5）。

来年度は講義・教材等についてのアンケートの集計結果と回答率の変動を調査するとともに、回答率の更なる向上を目指して継続的に議論する。

教育システムの充実では、教員ポータルの利便性を向上させるため、2要素認証や学外利用ができるようにシステムの改修を行った（資料1-④-1）。

電子教科書の導入に向け、NTT西日本の担当者による説明会の開催と、教員・学生向けのアンケート調査を行った（資料1-④-2）。その結果、6割は賛成またはどちらでも良いとの回答であったため、導入に向けて前向きに検討することになった。

3回生後期の総合医療薬学演習（医療薬学コース必修科目）と総合創薬育薬演習（創薬育薬コース必修科目）では、実施日を事前に周知するとともに、実施内容と評価法の詳細を初回の演習日に説明した（資料1-④-3、資料1-④-4、1-④-5）。本年度の演習において、実施日、内容や評価等について不満の声はなかったため、適切に改善されたと思われる。

カリキュラム等の持続的な改良では、連続して留年する学生を適切に指導するため、昨年度と同様に再試験の受験者が多い科目などで補講を実施した（資料1-④-6）。また、学生の単位修得状況を保護者に知ってもらうため、学生ポータルの保護者版を作成し、運用を始めた（資料1-④-7）。

大学における学習および生活環境の改善に向け、学生が講義の合間や疲れた際に利用できるようにヨギボーを購入し、本部学舎と三田洞キャンパスにリフレッシュスペース・ルームを開設したが、周囲の目が気になって利用しにくいという声があがっていた。そこで、設置場所の変更や遮蔽板の導入により、学生が利用しやすい環境に改修した（資料1-④-8）。また、2回生学生と学長・教員との昼食会・意見交換会を行い、学生の率直な意見を聞き取った（資料1-④-9）。意見に対する回答書を作成し、教授総会で教職員が情報を共有するとともに、学生に回答した。

以上、今年度は当初の予定通り活動ができたため、来年度も同様の取り組みを行う。

大学院進学学生の支援において、令和4年度、令和5年度の取り組みが功を奏し、6年制薬学部の卒業生が進学する博士課程（4年制）に所属する学生は38名で、定員の約2倍に到達しており順調である。一方、学部の6年制一本化で廃止となった薬科学科（4年制学科）の学生が進学していた「博士前期課程（修士課程）と博士後期課程（3年制）」の学生数が顕著に減少し、特に博士前期課程は1学年1～2名程度しか在籍していない。博士・博士後期課程は学振、JST Springプロジェクト、長井記念、大学独自のプログラムで充実してきたが、未だほとんど援助されていない「博士前期課程」学生の生活不安などを軽減して学業・研究により集中できるシステムの確立を中心課題に据えて検討するとともに（1年で解決できるとは考えていない）、進学対象の学内外学部学生に周知する取り組み

を強化して、修士課程の充実を図り、結果として博士・博士後期課程のさらなる充実を図る必要がある。今年度は博士・博士後期課程、大学としての資金繰りによる経済的援助（競争的な資金が獲得できなくても1年目は約102万円）を確立・充実させて、進学における生活不安を部分的に払拭した。さらに、JST Springプロジェクトの本学割り当て定員は従来の3名から7名への増員に昨年度成功したところであるが、令和6年度からは16名の定員枠を確保することに成功し、博士・博士後期課程の社会人学生を除いた在籍学生数の半数以上がJST Springプロジェクトまたは学振に採用されている状況にまで到達した。

令和5年度もJST Springプロジェクトを中心として、学生の海外派遣（米国とスペインにそれぞれ3ヶ月間、D1の学生）と、ラクオリア製薬・新日本科学（株）での国内インターン（各1週間、D4の学生）などにも積極的に取り組み、学生の研究力の向上と共に、モチベーションの向上を図った。また、JST Springプロジェクトに関しては、東京薬科大学との連携協定を結び、相互に訪問して報告会・発表会を開催したり、日本薬学会年会の学生シンポジウムを開催するなどの相互交流を展開している。

本年度（令和5年度と令和6年度の博士・博士後期課程大学院生）は予想を遙かに上回る数を受け入れることができた。学業・研究により集中できるシステムの構築は順調に進行している。このような成果がもう2年ほど継続できれば、博士課程と博士後期課程の大学院定員を各5名から各8名あるいは10名へと増員申請できるものと考えている。

一方、博士前期（修士）課程の学生の支援はほとんどなく、特に進学母体となる学部・学科を持たない本学の博士前期課程は厳しい状況が続いている。博士課程は6年制学科からの進学が順調であり、良好に進展しているが、博士前期課程を充実させないと、いずれ博士後期課程も「社会人学生」のみで構成されるように変貌する可能性がある。次なる改善・改革の矛先はまさにここにあると判断している（今後の課題の項目4を参照）。

今後の課題として下記の5点が挙げられる。

1. 外部からの資金による、本学大学院進学学生への返還義務のない助成制度の確立・拡充に向けた取り組みを開始する（継続的Action）。
2. 学部低学年を対象とした「キャリアガイダンス」の充実を図り、大学進学の研究に対する高いモチベーションの維持に努める。
3. 大学院休学期間、システムの明確化、コース博士の認定期間の明確化（退学者はコース博士として扱わない）、学位審査のシステム検討に取り組み、よりわかり易い大学院運営に努める。
4. 令和6年度より博士・博士後期課程の学生の内、JST Springプロジェクトに

採択された学生は、大学が提供するリサーチアシスタント（RA）手当は受給できないことに変更した。特に本年度より、JST Spring プロジェクト採用者が増員されたので、従来の RA 手当分の予算が余剰となるため、これを修士課程の学生支援金として利用する方向で検討を開始する。

② 長所

1. 教学 IR 推進室を新設し、全学的な教育施策のデータ収集・分析並びに継続的な改善の推進及び支援に取り組んでいる。
2. JST の次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける支援者が 7 名から 16 名に増員され、本学博士・博士後期課程の学生に、生活費と研究費を支援する制度を拡充させた。

③ 改善点

1. 全開講科目の講義・教材等についてのアンケート回答率は 45.3%（令和 4 年度）から 57.4%（令和 5 年度）に増加したが、さらなる増加に向け改善が必要である。
2. 博士前期課程の入学者数が定員に足りていないため、改善に向けた取り組みが必要である。

2. 「研究」に関する自己点検評価

① 概要

本学が参画している名古屋大学を中心とする起業プラットフォーム Tongali が大学発新産業創出基金事業スタートアップ・エコシステム共創プログラム（スタエコ共創）に採択され、令和 5 年度からの 5 年間で総額 5,191,500 千円（直接経費）の支援を受けることが決定し、本学も事務的経費（プログラム推進費）として令和 5 年度は 3 ヶ月の執行期間を鑑み、0 円申請としたが、令和 6 年度は 9,730 千円（直接経費）を獲得した（資料 2-①-4-1、2-①-4-2）。C-DAM フルネームの紹介があったほうが良いのではでの申請との連携しながら、次年度はシーズ発掘、GAP ファンドプログラムの公募に臨みたいと考えている。また、令和 6 年度中には本事業に関わる事務職員 1 名を採用する予定である。資料 2-①-1, 2, 3 がない

「地域住民の健康と生活の質の向上」では、昨年に引き続き違法薬物（フェンタニル類似体）に関する研究が行われた。昨年、化合物の合成がコロナ禍で進まなかったことが研究の進展に本年度も影響を与えたが、研究を継続していく。また、その成果の一部は岐阜県保健環境研究所が主催した第 60 回全国薬事指導協議会総会（2023/10/20）で発表されており、岐阜発の研究成果を全国に発信することが出来た（資料 2-②-3）。なお、本研究に関しては来年度からも新たに科研費の採択が決まっている。岐阜県警科学捜査研究所と連携した危険ドラッグの健康被害機序の研究も引き続いて実施し、着実に成果をあげている。さらに薬物乱用防止講話を大垣北高校で行うことで地域貢献を果たすことができた（資料 2-②-4）。本講話に関しては来年度も実施することが決定している。危険ドラッグ解析技術連携協議会に関しては日程が合わず開催できなかったが、来年度前期での開催に向けた準備を行っている。資料 2-②-1, 2 がない

薬草園の一般公開は再開されたものの、園での講義は行えなかった。一方で、地域へ向けての薬草の知識普及活動として池田町での薬草教室や講演会（2023/10/21 内藤記念くすりの博物館）を実施した（資料 2-②-5）。来年度には薬草園の一般公開を実施予定すると共に、高校において食にまつわる薬草に関する講義を行う予定である。

岐阜市薬用作物栽培組合に関しては、薬用植物の栽培、調製加工に取り組み、ジオウの出荷のめどが立ってきた。黒字とはいかないものの、将来の可能性が見えてきたと考え、引き続き岐阜市薬用作物栽培組合に出かけて指導を行う予定である。

「地域産業の発展支援」では、本学のステークホルダーと連携して、地域産業

の発展を支援する本学教員の研究シーズ集第2版が発刊された（資料2-③-1、産学官個人ページ）。

「研究業績の積極的公表」では、令和4年度分の学術論文、総説以外の大学の業績として、著書、学位論文を「学術情報リポジトリ」に収載した（<https://gifu-pu.repo.nii.ac.jp/?page=1&size=20&sort=controlnumber>）。ただし、「学術情報リポジトリ」収載先のバージョン更新（WAKO2→WAKO3）に伴い、入力環境が悪化したため、令和5年度分の業績入力は来年度に持ち越しとなった。上述のシーズ集（資料2-③-1）にはリサーチマップのリンクが挿入され、同冊子から各教員の研究業績へのリンクも可能になった。図書館HPについては、更新のための予算がつき、独立したHPとして新たに開設された（<https://www.gifu-pu.ac.jp/library/>）。

「倫理、利益相反に関する規範順守・意識の醸成」では、FD講演会への教職員の参加率が60%程度と低迷していること、教育に関するFDを過去数年間実施していないことを受け、全教職員を対象に、FD・SD講演会を4回、対面とWebを併用して開催した。講師に事前に許可を頂き、所用で欠席した教職員のために講演を録画し、欠席者には後日受講してもらうように配慮した。講演会の出席率が教員については平均92%、職員については約42%、全体では約79%と、前年度的全職員出席率60%に比し大幅に改善した（資料2-④-1）。来年度、教員については本年度の方法を継続し、職員については令和7年度からの独法化も踏まえZOOM配信による視聴を積極的に推奨していく予定である。講演会内容については、テーマによって職員の出席率が大きく変動していることから、職員に対しても研修となるような内容を取り入れて開催していく予定である。

② 長所

着実に次世代育成や地域貢献に関する研究を展開する体制が整備されてきた。また、法人化に向け、その成果を社会に発信する体制が整いつつある。

FD・SD講演会を対面とWebを併用して開催し、録画視聴を可能にしたため、大幅に受講率が向上した。

③ 改善点

改善点では無いが、来年度以降のスタートアップ起業に向けた規程の整備を行っていく予定である。

3. 「社会貢献」に関する自己点検評価

① 概要

講演などの社会貢献における実態把握ための調査が事務局により実施され、大学としての社会貢献の把握が行われた。また、その成果は集約して岐阜市本庁において市長および市幹部に紹介された（資料 3-②-1）。大学 HP にもその資料が掲載された。今年度は下記の取り組みが行われた。

「脳と体を元気にする教室（全 12 回）」については大学 HP で開催告知がされた上で実施された（資料 3-②-2）。

ワクチン接種を啓発する劇が感染制御学研究室と演劇部によって市内幼稚園で開催され（https://drive.google.com/file/d/1ahixUbjorPVTsFBX5pHh1EMKOGuFSN6P/view?usp=drive_link）、岐阜新聞でも紹介された（https://www.gifu-pu.ac.jp/intl/files/vaccine_gifushinbun.pdf）。

さらに、ボランティアサークルが結成され、企業、教職員の協力の元、フードドライブを実施した（資料 3-②-3）。

大垣北高校で「薬物乱用防止教室」を開催した（前述、資料 2-②-4）。

地域の薬剤師に向けたリカレント講座ⅠとⅡが各 5 回 web 開催された。本リカレント講座に参加し、必要な単位を取得した地域リーダー認定薬剤師 6 名（うち新規 4 名）が認定された（資料 3-①-1）。岐阜薬科大学薬剤師生涯教育講座が地域の薬剤師対象に 8 回 web 開催された（資料 3-①-2）。岐阜市科学館と共催の「岐阜科学塾ジュニア講座」が開催され、「薬用植物による染色体験～クスリの色をちょっとだけ科学する～」をテーマに岐阜市内の小中学生が染色体験を行った（資料 3-②-4）。放課後スタートアップセミナーが中高生、大学生、大学院生、教職員向けに 4 回開催された（資料 3-①-3-1）。地域住民向けに市民公開講座が 5 回開催された（資料 3-②-5）。市民公開講座のテーマを記してはどうか？

地域貢献活動として、岐阜放送の市民向け健康番組、「教えて！薬大先生」で教員が出演し、薬や健康についての話題を解説した（放送は月 4 回）。（<https://www.youtube.com/playlist?list=PLQG7qD1jUkysdlqJA42SwEsY9QtLORjC2>）。

中日新聞「達人に訊け！」では岐阜薬科大学教員 4 名が各 6 話を連載し、合計 24 の話題を提供した。

地域貢献の内容は、新規に開設された地域交流推進センターの HP（<https://www.gifu-pu.ac.jp/regional-relationship/>）に集約された。

（2023 文案担当者不在のため北市）これは削除？地域交流推進センターの部局であるダイバーシティ推進室では、市費からの資金を得て、研究補助員の確保、連携共同型研究助成、ロールモデル・リーダーシップ講演会を実施した。

② 長所

リカレント講座や薬剤師生涯研修講座は web 開催された。地域リーダー認定薬剤師のうち、新規認定者は 4 名であり、岐阜市外など遠方の方も参加できオンラインでの開催のメリットがある。さらに、岐阜科学塾や放課後スタートアップセミナーなど小中学生や大学生を対象とした企画では、対面での参加により、実際に手に触れ体験することにより充実したものになった。

岐阜放送の「教えて！薬大先生」や中日新聞の「達人に訊け！」といったメディアを活用することにより、より多くの市民の方に情報発信することができる。なお、「教えて！薬大先生」は来年度も放映することが決定している。

③ 改善点

大きな改善点は無いが、これは削除？大学が主催または共催するリカレント講座や研修会に、より多くの方に参加してもらえるように HP などを活用し啓蒙活動を充実させていく必要がある。また、取り上げるテーマについては、社会情勢も反映させるなど最新の情報を発信していきたい。

さらに、地域交流推進センターの HP についてはさらなる充実を図っていききたい。

4. 「国際化」に関する自己点検評価

① 概要

本学では、英語会話および実用英語の授業を通して、日常会話や大学生活等身近なテーマから医療関連のテーマごとに、語彙力と「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」の4つの要素に関わる能力を身に着け、プレゼンテーションやディスカッションを通し、自分自身の意見を英語で発信できるグローバルな人材育成を目指している。

TOEIC 学内試験は引き続き実施し、全学生が受験できるよう年4回実施した。本学学生の TOEIC スコアは、全国の医療系大学の平均を上回り、学生の英語力の伸びを確認することができた。ただ、全学生を対象とすると、英語に対する意識は必ずしも高くなく、今後の課題として取り組む必要がある。

キャリアガイダンスの開催は継続して行い、外部講師を招聘した特別講義を行うなど、グローバルマインドを持った薬剤師・研究者の育成を目指している（資料4-①-1、4-①-2）。

学部・大学院の授業では、英語運用能力を強化するため、プレゼンテーションなどに力を入れた。英語プレゼンテーションコンテストを、岐阜市立女子短期大学との共催で行い、本学からは4グループ（15名）が参加した（資料4-①-3）。プレゼン教育に力を入れたことで、本学の参加者が前年度より増加した。

9月にフロリダ大学に教員2名学部生4名を7日間のプログラムで派遣した（資料4-②-1）。9月11日～14日に、学生5名、教員2名が中国の浙江大学薬学院を訪問し学術交流を行った（資料4-②-2）。また、10月に学長と国際交流委員長（江坂）が中国薬科大学の主幹で開催された第2回グローバル薬科大学&薬学部発展シンポジウムに参加するため南京市を訪問し、中国薬科大学側と会談した（資料4-②-3）。本会談では、中国薬科大学との前向きな交流計画の再構築に成功した。また、第2回グローバル薬科大学&薬学部発展シンポジウムにおいて、原学長が本学の取り組みを紹介する講演を行うなどにより、欧米を含めた有力校との交流の足がかりを得ることができた。訪中、訪米ともに、来年度の訪問の具体的日程を先方スタッフと調整し、内定した。中国薬科大学及び浙江大学とは交流に関する同意書の更新を進めており、近く締結する予定である。また、学生の相互短期留学（2週間から1か月）についても検討に入るとともに、浙江大学から提案のあった summer school への参加についても検討する（資料4-②-4）。

派遣する学生の選考については検討を続けており、特に訪米派遣について英語コミュニケーションの実力を評価するために、グループディスカッションによる評価を新たに加えた。訪米派遣では、能力、熱意ともに優れた学生が、現地

での高度な薬剤師教育プログラムの完全な英語環境での体験を行い、本学にとって得るものが多かった。浙江大学への派遣は、教員会談で大学間のより進んだ交流を目指す機運を高めた。一方で、浙江大学への学生派遣では訪問プログラムに合致する大学院生が含まれるべきであった。

② 長所

訪米派遣選考のグループディスカッション試験は、非常に有意義であった。

③ 改善点

訪中派遣選考では、反省点として、研究志向の強い学生の選考を改めて工夫する必要がある。